



マルクトを祖に持つ賢者の家系を持つイエソド、その子である
テレファトから分かれ
ゲブラーの子ケソド、ケソドの子コクマー、コクマーの子ケテルを
父とするシャーマは
グレイベルの秘された地よりの福音の鐘を神たるアイオーンの声とし
雷雲立ち込める嵐の中、余人には決してたどり着けぬ荒れた道を渡り
多くの民、多くの獣に見守られながら歩き続けました。

やがて稲光はシャーマを照らす後光となり、魔を打ち払い道を示しました。
雨は喉の渇きを癒し、幼き私シャロムを抱えた聖なるシャーマは
やがて辿り着いた大穴の底で大いなる聖杯に祈りを捧げました。

「ああ神よ。我らが大地グレイベルをお救いくださいませ。
今やこの地は魔物にあふれ、人心はなく腐り果てた王が手遊びのように
政を成し民は困窮に嘆くばかりです。
どうか神よ。名もなき神よ。貴方の子らをお救いくださいませ」

すると神はシャーマへ向け言葉を授けました。
「大地の祈り、陽の煌めき、水のせせらぎに至るまで
人よ、人よ。神無き大地で二本の足で立つ者よ。
清め、浄めよ。汝ら共に存り、大地へ祈れ。
汝らは父なる神、アイオーンの加護ぞある」

そうして御言葉を承ったシャーマは人々を安寧に導き
大地を浄化すべくグレイベルを正す旅に出たのです。

秋の頃、ラウステンのリニエにある白樺の並ぶ木立にシャーマは立ち寄りました。

そこではエルフとドワーフが相争っておりました。
エルフは矢を放ち、ドワーフは盾でそれをはじき返し
森と山の境には何本もの矢と死体が積み上がり
争いは千日も続いているかの様相でありました。

聖なるシャーマはそれを見かね、遠雷が如き御声を投げかけると争いは
びたりとやみました。
「エルフ、ドワーフよ。汝らは何ゆえに争うのか」

エルフはそれに怒りをもって答えました。
「ドワーフが我らの神聖な森を切り開き、根絶やしにするのだ」
ドワーフはそれに吠えました。
「お前たちの木々が山を蝕むのだ。見よ、我らが先祖の墓のありさまを」
ドワーフの指す場所には木の根が絡みついた立派な墓所がありました。

シャーマはそれを聞くと天に祈りを捧げました。
するとどうでしょう。立つことすらままならないほど大地が揺れ始めたのです。
エルフもドワーフもその場にうずくまる中、唯一シャーマだけが二本の足で
立ち、天に祈りを捧げ続けました。
やがて恐ろしい深さの亀裂が森と山とを裂きました。
そして瞬く間に嵐が現れ、過ぎ去った時にはそこに見渡すほどの大河が
横たわっていたのです。

エルフもドワーフも、シャーマの御業に畏れを成し武器も何も捨て
帰っていきました。

私はシャーマに尋ねました。
「なぜ川をお創りになられたのでしょうか」

「彼らは憎しみあい、もはやどうにもならぬほどにいがみ合っていた。
深い憎しみを癒すには、途方もない時を要するのだ。
この川の深さは、即ち彼らの憎しみの深さなのだ。
話してもどうにもならぬ者と分かり合うには
争っていたことすら忘れるほどの時が過ぎるしかないのだ」

シャーマは去っていったエルフとドワーフへ御言葉を投げかけました。
「エルフよ、ドワーフよ。この川は汝らが怒りを忘れ手を取り合ったときに
露と消えるだろう。
今は憎いだろう。だがそれはお前たちだけのものだ。
決して子や孫に伝えるな。お前たちの怒りは、お前たちだけのものである」

エルフもドワーフも、父なるアイオーンの威光を目の当たりにし
頭を垂れて天に祈りを捧げたのです。

春の頃、何かに導かれるようにシャーマはサリズンのデリングレーを訪れました。

そこには大勢の木こりがおり、見上げるほどに大きな木を切り倒そうと巨大な鋸を木にかけようとしておりました。しかしどういわけか、鋸が近づくとまるで威嚇するかのように大樹が揺れ木こりたちはほとんど困っておりました。

「父よ、彼らを助けてやれないでしょうか」
しかし父は首を振ると顔を真っ赤にして怒り、木こりに近づきました。
「汝ら、何故そのような非道の真似をするのか。
とく去れ。お前たちの求める者はここにはない」

木こりたちは困惑しシャーマに助けを求めました。
「旅の人よ。何故そのように起こるのか。
私たちはただ王に命じられ、この樹を伐っているのです。
しかしこの樹は魔物のように動き回り、ほとんど困っているのです」

シャーマは何も言わず、大樹に礼をするとそっと枝葉を避けた。
するとその奥には目を見張るほどに美しい顔があったのです。
「見よ。彼は木ではない。眠っているだけの古いツリーフォークなのだ。
この美しい眠りを、誰が醒ますことができようか」
「しかし旅の人。この木を伐れと王より命令が下っているのです。
従わなければ、私たちは明日の飯ももらえません」

その最中、北の方より王の使者を名乗る者が現れました。
「旅の人よ。お前はさぞ徳が高いのだらう。
しかし我らが王にはとても及ばない。世迷言をほざくなら去れ。
これは王命なのだ」

するとシャーマは彼らにこう告げました。
「私に任されよ。この美しいツリーフォークを退かせて見せましょう」

シャーマは天に祈りを捧げると、煌めく青い色をした小鳥がツリーフォークに止まりました。

すると閉じていた眼がぱたりと開き、シャーマを見やりました。
「古いツリーフォークの方、ここから去りなさい。
南に行けば貴方の仲間も見つかるだろう。
大地に絡まった貴方の根もほぐしておいた。
行き先はその小鳥が教えてくれるだろう」

するとツリーフォークは水晶がはじけるような音色でつぶやいた。
「ありがとう、神の徒よ。私は去ろう、南の森へ」
そうしてツリーフォークは去っていきました。

しかし王の使者はシャーマに抗議をしました。
「余計なことをしてくれたな。お前のせいで木材が手に入らなかった
お前は罪びとだ。そこに直れ。私が捕まえてやる」

シャーマはいきり立つ彼を前にまたしても祈りを捧げました。
すると王の使者はたちまち氣勢をやわらげました。

「王の使者を名乗る者よ。いきり立つな。
仕える者の品位は即ち王の品位である。
貴様の王が私より徳が高いと申すなら
貴様もそれに見合った行いを成すのだ」

勢いをそがれた王の使者はすごすごと去っていきました。

冬の頃、シャーマは民の助けを求める声を聴き、レヘルの森へやってきました。

そこには悪いオークがおり、人々を攫っておりました。
村の人々はシャーマへ頭を垂れて請いました。
「聖なるシャーマよ、モウルズバロウの救世主よ。
どうか我らをお救いくださいませ。
レヘルの森のオーク共が、我らの同胞を攫って食ろうておるのです。
奴らは力が強く、我らでは太刀打ちができません。
聖なるシャーマよ、どうか我らをお救いください。
我らの娘、息子、子々孫々に至るまで全てをあなた方へ捧げましょう。
代わりにどうか、森に住まう人さらいのオークを退治してください」

その懇願を聞きシャーマは風のようにレヘルの森へ急ぎました。
丁度オークたちが下品な笑い声をあげて村娘を食おうとしておりました。
シャーマは遠雷の如き声でそれを止めるとオークに言いました。
「オークよ。汝らも二つの手と二つの足があるのなら
父なるアイオーンに見初められる資格がある。
どうかそのような野蛮な行いはやめ、人として生きるがよい」

しかしオークはこれを拒み、なお村娘を食べようと口を開きました。
シャーマはこれを見かねて村娘を助けると、再度オークに告げました。
「やめるのだ。あなた方はまだ人に戻ることができる。
野蛮なことはやめ、よく話し、よく祈れ」

しかしオークはこれを拒み、村娘を奪われて腹を立てたのか
持っていた木槌で地面を叩き怒りをあらわにしました。

「父よ、彼らは人にあらず、魔物です。
何故そのように慈悲をかけるのでしょうか」

シャーマは悲しみに暮れ、目を落として私に言いました。
「シャロムよ。彼らはまだ人なのだ。
彼らを魔物とするか、人とするかは次の問いにかかっている。
どうかお前も彼らに声をかけてやってはくれないか」

「オークよ、人にあぶれる者よ。
どうかその槌を治め、天に祈りを捧げよ。
さすれば父なるアイオーンはお前たちを人として見染められるだろう」

しかしオークはこれを拒み、木槌を持って襲い掛かりました。
「しかたなし、であればオークよ。お前たちは魔物である」
シャーマが天に祈るとオークは灰となってかき消えました。

「この大地に魔物が住まうこと、神は許さず。
故にオークよ、人を捨てたお前たちは大地の穢れである」

以降、オークは魔物となり果て人の敵となりました。

春の頃、ウルズ王国の付近を巡礼していた時のことです。

シャーマは川岸に打ち捨てられた竜人を見やり、これを癒しました。
「旅の人よ、ありがとう。しかし私には何もない。何の礼もできないのだ」

謝意を述べる竜人へシャーマは首を振り問いました。
「竜人よ。貴方がこのような仕打ちを受ける人には思えない。
何があったのか、良ければ話してくれまいか」

すると竜人はシャーマへこう告げました。
「白壁山脈の頂上に悪竜がいるのです。街の人々は我ら竜人を
悪竜の子だと決めつけ、盗みや殺しが起こるたびに私たちを
下手人だと決めつけ痛めつけるのです」

シャーマは彼に祈りを捧げると強く抱き留め、そして御言葉を授けました。
「その人々の元へ連れて行きなさい。あなた方は決して悪竜の子ではありません。私
がその誤解を解いてあげましょう」
竜人はその言葉に泣いて喜び、シャーマをウルズへ案内しました。

ウルズにつくと、人々は隣にいる竜人を見て、盗人めと罵り石を投げました。
しかしシャーマが祈りを捧げると石はとたんに勢いを失い、地に落ちました。
どよめく人々にシャーマは遠雷の如き声で告げました。
「彼は悪竜の子ではない。このシャーマがそれを保証しよう」

人々はシャーマの名を聞いてさらにどよめきました。
この頃にはアイオーンに仕えるシャーマの名は方々に知れ渡っていたのです。
「何故罪なき人にこのような仕打ちをするのか」

シャーマが再度問うと、人々は口々に告げました。

「いや、そ奴は悪竜の子である。我らの麦を盗み、私腹を肥やしているのだ」

しかしシャーマは首を振り、天に祈った。
「神よ、この場にいる盗人に天の雷を与えよ。
嘘を吐く者は即ち大地の穢れである」

すると暗雲が立ち込め、周囲はたちまち暗闇のとぼりがおりました。
「私です、私がやったのです」

神の威光に耐え兼ね、一人の女が声を上げました。
シャーマが祈りを止めると雲は立ち消え、彼女に告げました。
「ああ、お前で間違いない。罪びとよ。自らの罪を告解するがよい」

「はい、私は悪竜に麦畑を焼かれ空腹に耐えかね
村の麦を盗み、竜人に罪を擦り付けました。
どうかお許しを、どうかお許しを」

人々は竜人に向けていた眼をその女に向け、口々に罵りました。
しかしシャーマはそれを止め、罪びとの畑へ案内を求めました。
「その女は罪びとなれど、その罪は女のものにあらず。
全ては白壁山脈の悪竜による因果である。
故にまずはその因果を絶たねばなるまい」

シャーマが畑に祈りを捧げると、御言葉を授けた。
「私の祈りは大地の祈り。父なる神アイオーンへの請願である。
よく話し、よく祈れ。さすれば共に、父なる神に見初められるだろう」
するとたちまち畑から新芽が伸び始めた。

「人々よ、竜人は悪竜の子にあらず。善なるものである。
これに懲りたら、自らの行いを見つめ直し
本物の罪びとを見つけるがよい」

人々はシャーマの言葉に悔い改め、シャーマの遺志を継がんと
弟子となりました。

シャーマの教えがグレイベルの人々に知れ渡った頃
多くの人々がシャーマの元へ訪れ口々に懇願しました。
「聖なるシャーマよ、どうか悪竜を調伏してはいただけまいか。
あれは我らの麦を脅かし、村を焼き人々を殺します。
どうか白壁山脈の悪竜を滅ぼしてくだされ」

するとシャーマは御言葉を授けました。
「悪竜は手ごわく、私の力だけでは足りない。
まずは悪竜の住まう白壁山脈の頂まで続く道を作らなければなりません。
その大役を、あなた方に預けましょう」

弟子たちはこれを聞くと私財を投げ打ち
樹を伐り山を拓いて立派な山道をこしらえました。

シャーマはこれを見て御言葉を授けました。
「よく話し、よく祈る者たちよ。あなた方はアイオーンの子である。
神よ、敬虔なる彼らを癒したまえ」

すると千人の弟子たちの疲れはたちどころに消え去りました。
また彼らの手の中には一粒の豆が現れ、それを口にすると一日中働くことができました。

私はシャーマに問いました。
「父よ、これほどの癒しは見たことがありません。神は我らを祝福してくれているのでしょ
うか」

シャーマは私の問いにこう答えました。
「否、これは私だけの祈りではない。彼らの祈りがあって初めて成しえた奇跡である。
忘れるな、奇跡とは私だけのものではない。アイオーンへ祈る人の子全てに宿っているのだ」
シャーマは再び天に祈りを捧げました。

やがてシャーマと弟子たちは白壁山脈の頂、悪竜の眼前へたどり着きました。

悪竜はうなりを上げ火を放ちましたが、シャーマが祈りを捧げるとたちどころに消えま
した。
「なぜこのような悪行を為すのか。その力は無暗に暴れるためのものではない。
賢い龍よ。何をお前が駆り立てるのか」

悪竜はあざ笑うかのようにうなりを上げました。
シャーマは悪竜に御言葉を授けました。
「否、私はお前を救いに來たのだ。
悪竜よ、これ以上罪を重ねることはない。
とく去れ。お前の仲間が西で待っているだろう」

悪竜はさらに火を放ち、暴れ狂いました。
シャーマは重ねて御言葉を授けました。
「生あるものは皆惡にあらず、善にあらず。
惡たらしめているのはお前の弱い心である。
自身を見つめ、考えを改めよ」

しかし悪竜は火を止めず、やがてその魔は弟子たちを犯し
次々と倒れ伏しました。

その時、山の背から次々と兵士たちが現れました。
様々な紋を背負った彼らは、ラウステン、サリズン、モウルズバロウ、レヘルにてシャーマに助けを請い、助けられた者たちでした。
彼らは油断した悪竜の隙を突き、その鱗の隙間に剣を突き立てました。
しかし悪竜はビクともしません。

シャーマはそれを見やると一際大きく天に祈りを捧げました。
すると兵士たちが突き立てた剣が水に沈むように悪竜を刺し貫きました。
シャーマは悪竜に向けて御言葉を授けました。
「悪竜よ、お前は私に敗れたのではない。
よく話し、よく祈る者たちに敗れたのだ」

シャーマは悪竜の声無き声を聴き、深く祈りを捧げました。
「大地は穢れ、魔神が目覚めを待っていると申すか。
ならば我らはひたすらに大地を浄化するのみ。
そして來たるべき時に父なる神アイオーンへこの大地を返そう」

こうして悪竜は祈りの前に倒れたのです。

シャーマは自身の最後の地をイエールに定めました。
連日連夜、多くの弟子たちがシャーマに御言葉を授かり、祈りを捧げました。

やがて最後の時が来るとシャーマは弟子たちを集め、御言葉を授けました。
「人々よ。大地を浄めよ。私が穢れの半分を持って行こう。
よく話し、よく祈れ。さすれば共に、父なる神に見初められるだろう」

私はシャーマへ問いました。
「貴方なき世界で、我らはどのように世界を救えばよいのでしょうか。
最後の御言葉をお授けください」

シャーマは私と、弟子とを見て最後の御言葉を授けました。
「今から告げる三つの事柄をよく守りなさい。
一つ、隣人が困っているならばそれを助けなさい。
二つ、日に一度、大地と隣人の平和祈りを捧げなさい。
三つ、私の旅を学びなさい」

この三戒を以てシャーマは天の地へ旅立たれました。

